2023/12/22

リサーチ

NO 138

通巻 195

発　行　者

北海道公民館協会
会長　山本　進

060-0002
札幌市中央区北２西７
かでる2.7（９Ｆ）
道立生涯学習推進センター内
011-271-2825

「ＤＸで進む新時代の社会教育主事講習のあり方」

北海道公民館協会会長
東神楽町長　山本　進

北海道内の公民館関係の皆様、社会教育関係の皆様には、日頃から当協会の活動に際し、ご理解ご協力を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。また、十月五日から二日間にわたって開催されました「第四十五回全国公民館研究集会北海道大会・第六十七回北海道公民館大会ｉｎくしろ」の開催におきましては、新型コロナウイルスの対応が五類になって初めての開催で、久しぶりにコロナの感染におびえることなく、交流会も含めて開催することができました。この開催に当たりましては、全国公民館協会連合会をはじめとする関係団体の皆様、地元釧路市の皆様など、多くの皆様にご協力いただきましたこと、改めて心から感謝申し上げます。おかげをもちまして、とても有意義な議論を積み重ねることができ、テーマである『コロナ禍以後の北海道の地域づくり～地域創生に導く「ひとづくり・地域づくり」あなたの地域はどうしますか～』のもと、参加者の皆様と意識を共有し、コロナ感染期を経て変化した社会における公民館のあり方や未来へ向けた公民館と地域づくりを考えることができたと思っています。

さて、個人的なことではありますが、私は、今年五月から文部科学省の中央教育審議会の中に置かれている社会教育人材部会の委員を拝命いたしました。委員は、大学等の先生や、自治体の社会教育関係者、民間企業の方々などですが、北海道からは私だけで、全国の首長の中でも唯一の委員となっています。これは、文部科学省の委託を受けて、令和二年度から北海道立生涯学習推進センターが実施する社会教育主事講習を、全国に先駆けてオンラインで実施し、成果を上げていることやそのカリキュラムなどについても注目されていることもあって推薦されたのかもと思っています。北海道で行われている社会教育主事講習は、北海道の抱える地域特性、いわゆる「広くて移動に時間がかかる」ということを乗り越えて、オンラインでの実施を検討していたところに、コロナ禍が襲いかかり、それも契機としながらも、急速に進むオンラインの技術を取り入れて、実施できたものです。実際に、社会教育人材専門部会でも、北海道の事例が発表されましたが、その特徴としては、

①全科目オンライン実施により、東京大学の牧野篤教授をはじめとする多彩な講師による質の高い講義が受けられるようになったこと

②「社会教育演習」による専門的分野に特化した学びや実践力を身につけるため、地方創生、防災、放課後活動、高齢者教育など、現実に即したテーマから受講者が選択してグループで協力しながら事業企画案を作成するようなカリキュラムを作成したこと

③北海道社会教育主事会協議会と連携し、管内ごとの社会教育主事会や道教委社会教育主事会なども一緒になって受講後のフォローも進めていること

などのように、オンラインを先駆的に取り入れて改革した成果も徐々に現れていると思っています。社会教育人事部会の中でも全国からさまざまな事例が発表されましたが、オンラインに関しては、他の都府県よりも北海道の先進性が際立っているように思います。実際に北海道の社会教育主事講習は、受講者のデジタ

ルリテラシーの向上も進み、さらに北海道の課題であった距離も克服して、札幌市以外の管内からの受講者も増加して成果も現れています。オンラインでやることで、リアルな議論に一部制約がでる点や対面して行う一体感の醸成ができにくいなど、課題はありますが、この時代ですので、さまざまな工夫を凝らしながら、今後もオンラインで進めていくものと思っています。私どもの東神楽町でもオンラインでできることになったので、毎年1人は社会教育主事講習を受けさせることができています。首長からとってみても、社会教育主事の資格を取るためにさまざまな学びをすることは、地方自治の最前線に立つ自治体職員に必要なスキルを身につけることでもありますし、職員研修の一つとしても大変有益だと感じています。次年度以降もぜひ、さまざまな自治体から受講していただければと思います。また、北海道公民館協会でも、オンラインを活用した取組みやDX（デジタル・トランスフォーメンション）の取組みを進めるため、さまざまな事業も進めています。私も釧路では「公民館におけるDXのススメ」として、Google認定トレーナーの尻江重幸さんと一緒に講演をさせていただきました。リアルなつながりを大事にしながらもさまざまな場面でデジタルの利点を享受することが必要です。引き続き皆様とさまざまなデジタルの活用について研鑽を重ねていきたいと思います。

「　メッセージに思いを込めて　」

公益社団法人全国公民館連合会
会長　中西　彰

まずこちらを紹介します。

『自宅の裏に百坪ほどの畑がある。　新築移転当初は鍬を入れるたびに「瓦や瀬欠けガラガラ」、畑作りを視野に入れなかった計画性のなさを悔やんだものだった。それでも母が毎日手入れをして季節の野菜や花々を育ててくれたおかげで、少しずつ畑らしくなった。私はもっぱら「今年のサトイモうまいね」「このチョウセンギクきれいだね」などというのを仕事にしていたのだが、近年は我々夫婦の方が、身体が思うように動かない母の指示監督のもと、日曜ごとに慣れない手つきで鍬を使っている。

そうなると不思議なもので、今まで何気なく見過ごしていた、よその畑が気になってくる。近所はもちろん、通勤時に見かける見知らぬ家の畑にも目が行き、植え付けられた作物の種類、野菜の育ち具合、手入れの仕方などが夕食時の話題に出るようになった。「あそこの家、もうタマネギを収穫していたよ」「ジャガイモは我が家の方が元気に育っているよ」などといった具合である。できる範囲でしかやれないのはわかっていても、ついつい比較し、競争心が顔を出すのは悲しい習性だろうか。

もっぱら収穫物の恩恵に与っていただけの頃と違い、畑作りの辛さをしみじみ味わうことにもなる。力仕事で腰が痛くなったり、天候に左右されて思うように進まなかったり、苦労は数え切れないが、中でも、雑草との闘いは想像を絶していた。順番に草を取り進むのであるが、なにしろ日曜日しか働けないので、一回りした頃には最初の区画は伸び放題、肝心の野菜はどこかに隠れてしまっているといった具合である。

「母はよく一人でこんなことをやっていたものだ」と今さらながら感心している。（～続く）』

（平成十四年六月砺波高校ＰＴＡ通信「日曜農園奮闘記」から抜粋）

これは富山県内の高校で校長を勤めているときにＰＴＡの機関紙に寄せた原稿です。前半のエピソード部分を引用しました。ここから教育的要素に変換してまとめに入りました。このときは「生きる力」をテーマに、雑草と温室野菜になぞらえて、生徒たちが手厚い義務教育という保護から、厳しい大人の社会に向けて力をつける時期であることを保護者に向けて伝えたものとなります。

このようにエピソードから教訓を抽出して教育的要素に変換するときに重要なことがあります。それは何を伝えたいか何を理解してほしいのかを明確にして変換することです。

世の中には教訓とする言葉でも、表面的には相反する言葉がたくさんあります。「急がば回れ」「先手必勝」「大は小を兼ねる」「過ぎたるは猶及ばざるが如し」など、それぞれ語源となったエピソードから教訓が導き出されています。つまりそこにどのようなメッセージを添えるかによって教育的要素を備えることになります。

一休さんで有名な「このはし　わたるべからず」というトンチのお題があります。新任教員向けの研修会でよくこれを引用して「橋の端では

なくど真ん中を渡りなさい」、ということを伝えていました。これは「長く公務に携わるにあたり、法律（橋）のぎりぎり（端）を考えるのではなく、誰が見ても非難されない（ど真ん中）行動をしなさい。後暗いことなく安心して職務に邁進してほしい」とのメッセージが込められています。

組織が実施する研修でも「この研修を通じて何を伝えていきたいか」を広く模索してプログラムを作り上げていきます。今年十月に釧路市で開催された北海道公民館大会を始めとして毎年の大会プログラムからその意図を強く感じとることができます。これは組織が提供する学びの場で決定的に必要なものです。費用を投じて提供する学びは講師の選定ひとつを取っても入口こそ「なんとなくいい話をしてくれそう」から着手したとしても、実施に至るときには何を伝えたいかということは主催側で明確に共有している必要があります。その点では毎年有意義なプログラムを提供している北海道公民館協会の大会や研修会からとても強いメッセージ性を感じることができ、山本会長を筆頭にした役員や事務局のご尽力に衷心より敬意を表します。

来年の全国公民館研究集会北海道大会は東神楽町での開催となります。皆様にお会いできることを楽しみにしています。

「地域社会に根ざしたWellビーイングとは？」

北海道公民館振興首長会
会長　西山　猛

はじめに、道内はもとより全国からも多くの参加者を迎え、「第四十五回全国公民館研究集会・第六十七回北海道公民館大会ｉｎくしろ」が盛会裏に開催できましたことに北海道公民館振興首長会として、心より厚くお礼と感謝を申し上げます。

とりわけ、前日に来賓や講師の皆さんと眺めた幣前橋からの夕日は、とても美しく格別なものでした。観光都市でもある釧路を象徴するような絶景でありました。

大会では、様々な報告や課題提起のもと熱心な討議も行われ、大変有意義な二日間となりました。大会準備に当たられた関係者の皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。

今回の大会では、テーマでもある「コロナ禍以後の北海道の地域づくり」に沿った基調講演や　シンポジウムで多くの示唆がありました。今年も高校生の参加があり、未来の地域づくりのキャスティングボートを握っている重要な世代であると再認識しました。

第一日目の行政報告として、文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長の高木秀人氏より「社会教育を取り巻く最近の動向」～第十二期生涯学習分科会で議論されている、公民館をめぐる動き～について行政説明・情報提供がありました。

大きく四点にわたるもので、①今後の生涯学習・社会教育の振興方策②社会教育の裾野の広がりと社会教育人材に求められている役割③社会教育におけるデジタルの活用と施設の機能強化④地域と学校の連携・協働の推進を柱にお話がありました。第十一期の生涯学習分科会での議論の整理としてまとめられた、「Ｗｅｌｌビーイングの実現」を目指すことを根幹に＊社会的な包摂の実現＊ともに学び支え合う生涯学習・社会教育＊地域コミュニティの基盤＊デジタル社会への対応をうまく絡ませながら「人への投資」「デジタル田園都市国家構想」を念頭においた取り組みの必要性に触れられました。

そこから、次期教育振興基本計画（素案）の総括的基本方針として示された「日本社会に根ざしたＷｅｌｌビーイングの向上」「持続可能な社会の創り手」の育成」に至った経緯が説明されました。

最近、頻繁に耳に入る「Ｗｅｌｌビーイング」という言葉ですが、私の村・更別村においても「デジタル田園都市国家構想」に採択された後、年二回に渡る「Ｗｅｌｌビーイング指標」に基づく村民アンケートを実施しています。そこから見えてくることは、国の客観数値と実際の数値に隔たりがあることから、実際に住民が考えている「暮らしやすさについての課題や幸福感（満足感）」に違いがあるということでした。

これは、とても象徴的なことであると考えています。現に、この後開催されたシンポジウムにおいての高校生達の貴重な発言は、「はっ！」とさせられる大変重要なものでした。会場にいる大人は強くこのことを感じたはずです。我がふるさとに対する強い想いや愛着、「どうしたら町を盛り上げていけるのか？」「課題はどこにあって、どう解決していけばいいのか？」「私たち高校生は（自分）、何ができるのか？」

「何をしなければならないのか？」が熱く語られ、議論されていました。コーデイネータの牧野先生やパネラーの杉浦さん、毎日新聞社代表の末次さん、吉田理事さんの絶妙なトークに合わせ、とてもマッチングした内容の濃いディスカッションになったと思います。

人口減少・少子高齢化の中にあって、これからの町づくりを自分事として、しっかりとした考えを持ち、将来にわたっての行動を具体的に考えていく姿勢には、我々大人が、「こうしてあげよう。ああしてあげよう。」と彼らのことをあまり深く考えず、半ば短絡的に上から目線で見ていたことに、本当に恥ずかしい思いがしました。

彼らもまた地域づくりの重要な主体者として、その一躍を担って行くことを確信しました。その意味では、まさに、これからの公民館活動のキャスティングボートを担っていると言っても過言ではありません。そういった意味でも今回の大会は感慨深く、大変意義深いものとなりました。彼らのWellビーイングこそが次世代の幸福感・幸せ感になるのではないかと考えています。公民館活動の未来は、明るいですね！

最後に、幣舞橋の岸辺で行われた交流会、とっても楽しかったです。時間の経つのも忘れてしまうようでした。久しぶりの顔を合わせての交流会、海の幸をほおばりながら、やっとコロナが明け始め、日常を取り戻しつつあることを実感しました。岡部教育長さんや教育委員会の皆様、関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。

来年の開催地は、分科会で山本町長が発表した「デジタルを活用した取り組み」の先進事例が多くある東神楽町です。また皆様方にお会いできる日を楽しみにしています。

道教委通信

★北海道教育推進計画について

令和五年三月に北海道教育推進計画が北海道総合計画、北海道総合教育大綱のほか、SDGsやESDの理念を踏まえて、令和5年度から令和九年度までの計画として策定された。

本道は人口減少、少子化が顕著なほか、情報技術やグローバル化の進展など変化の激しい時代を迎え、人々の価値観、ワークスタイルの変化など多様な生き方が進み、従来の知識や経験のみで解を見出すことのできない状況が見られる。

道教委としては、子どもたちに豊かな人生を送って欲しいとの願いを込め、社会の変化に主体的に向き合って自らの可能性を発揮し、未来を切り開いていく力を身に付けるとともに、主体性を持って地域社会の担い手として成長できるよう、北海道の未来を見据えた持続可能な教育の実現などについて教育施策の方向性を示し、各種取組の充実を目指している。

【三つの柱と二十二の施策項目】

本計画では三つの柱と二十二の施策項目が設定されている。

〈施策の柱1〉

子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

〈施策の柱2〉

学びの機会を保障し質を高める環境の確立

〈施策の柱3〉

地域と歩む持続可能な教育の実現

生涯学習及び社会教育に関連する施策については、主に〈施策の柱3〉に示されている。

【生涯学習・社会教育関連施策】

各施策項目には推進指標が設定されており、令和四年度の現状値に対して、令和九年度の目標値を設定している。

◎地域と学校の連携・協働の推進〈現状値→目標値〉

・学校運営協議会を設置している学校の割合〈七十四％→九十三％〉

・地域学校協働活動推進員等が学校運営協議会に参画している学校の割合〈三十・六％→五十六％〉

・地域学校協働活動推進員等を対象とした研修の参加者数

〈七十三人→毎年度百六十人以上〉

◎生涯学習・社会教育の振興

・生涯学習の成果を活用している住民の割合〈五十九・五％→八十％〉

・社会教育主事を配置している市町村の割合〈六十八・七％→百％〉

・障がい者の学習機会に関する実態把握をしている市町村の割合〈二十六・八％→六十四％〉

・道立青少年体験活動支援施設の利用者数〈十七万九千人（R1）→毎年度十八万九千人以上〉

・家庭教育サポート企業が教育委員会等と連携して家庭教育支援を行う市町村の割合

〈六・七％→五十四％〉

・公立図書館の来館者数

〈五百五十六万六千人（R3）→九百万人〉

◎芸術文化活動の推進

・学校教育活動として美術館・博物館を活用した学校数

〈百四十七校（R3）→二百十七校〉

・美術館・博物館のホームページの閲覧者数

〈二百十二万六千件（R3）→二百七十四万三千件〉

・指定文化財所在市町村で北海道文

化財保護強調月間に「文化財を活用した事業」を実施している市町村の割合
〈八十三・一％→九十七％〉
・「北海道・北東北の縄文遺跡群」など地域の文化財を活用した教育活動を実施した学校の割合〈七十九・七％→百％〉

【目標達成に向けて】

前項の各施策には、令和九年度末の目標値を定めるとともに、十年後を見据えて、取組を進めていくこととなっている。

広域分散型の本道においては、オンラインやオンデマンドによる学習機会の提供など、どの地域に住んでいても等しく、質の高い教育を受けられることができる学びの保障と継続性が重要と考えており、社会教育主事講習は、基本的にオンラインで実施し、実績をあげている。

また、新型コロナウイルス感染症が第5類に移行したこともあり、集合型での研修も増加し、青少年教育施設等での自然体験などの体験活動の効果についても改めて見直されている。

道教委としては、それぞれの特色を生かし、全ての人が主体的に学び、生涯にわたって学び続ける意欲の持てる教育を実現するとともに、ウエルビーイングな社会を実現できるよう様々な取組を着実に進めていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

随時、研究の成果を皆様あてに提示してまいりますので、本会加盟市町村におかれましても、是非、御理解・御協力をよろしくお願いします。

「公民館での4年間を振り返って」

名寄市公民館長　佐々木　憲一

道内で新型コロナ感染症が流行し始め、市内の公共施設の休館が続く令和二年四月、私は名寄市公民館に異動となりました。公民館の仕事は、合併前の風連町時代に担当したことがあり、初めて担当した平成十一年からは、杉並区や港区との「都会っ子交流事業」や子ども会活動など、子どもの事業を中心に担当し、ほかに公民館図書室や放課後児童クラブなども担当していました。十七年ぶりとなる公民館での仕事でしたが、合併前と大きく違っていたのは、公民館図書室や児童クラブ、歴史民俗資料館などの社会教育施設の仕事が、それぞれ図書館、児童センター、博物館の所管となっていたことです。現在は、子どもから高齢者までの生涯の学びに携わる生涯学習の仕事や公民館活動の仕事や、エンレイホールでの自主事業が中心となっていました。

とはいえ、新型コロナの真っただ中、終息の目処も立たない中、公民館での仕事が始まりました。事業をするにも、貸館をするにも、三密を避け、安全に配慮しなければなりません。施設の閉館が解除されたころには、安全に配慮しながら、少しずつ子ども会の事業や公民館の事業を再開してきました。ただし、人と人の距離をとりながらです。人づくり・つながりづくりとは程遠い状況でしたが、安全に事業を実施する方が大切で、事業を切らさないで続けることに努めてきました。

何とか、コロナ禍でも事業を続けてきたおかげで、令和四年度の子ども会リーダー育成事業「わくわく！体験交流会」では、募集定員を超える応募があり抽選で三十人の参加者を選びました。あまり事業ができなかった年に用意したソロキャンプテントで、密にならないキャンプ体験などを実現してきました。

市民の学びや活動の拠点として、公民館などの社会教育施設が大変重要な役割を担っています。学びを通じた「人づくり・つながりづくり・地域づくり」といった社会教育や公民館が担ってきた機能が重要となっています。市民講座や子ども会活動、家庭教育講座など、さまざまな場面を通じ、人が成長していくことやその活動の中での人と人のつながりづくり、人と施設のつながりづくりなど多様な関係づくりを進めることにより、地域の元気につながっていく「地域づくり」が進んでいくことと考えます。

名寄市では、市民講座「エンレイカレッジ」で、名寄市の歴史や産業、観光、福祉などについて学んでいます。今年度は八月から二月までの七回の講座で隠れた観光地の滝を見学したり、煮込みジンギスカンを食べたり、ボランティアに触れたりしました。こういったひとつ一つの講座の中でまなび、つながりが生まれ、そこからまちを考える機会となっていることと思います。

こういった、公民館だからできる取り組みを進めながら、学びたい人の手助けをしていきたいと考えています。

これらの活動の中で、道公民館協会の役割は大変重要です。公民館職員研修から始まり、北海道公民館大会まで、私たちの活動に大いに役立つものばかりです。また、講師の選定に悩んだり、さまざまな場面で公民館協会に相談させていただきましたし、補助事業なども紹介していただきました。

北海道公民館協会とのつながりも、地域の学びの活性化に欠かせないものです。